

## 視点 小艦艇の活躍と 其ノ二 日本海海戦

海 軍 作 戦 の 見 直 し

### 駆逐艦と水雷艇で 優位に立った日本海軍

日露戦争といえば日本海海戦、三笠以下の戦艦部隊の大胆な敵前直角回頭を、読者の多くは思い浮かべるであろうが、日本海軍の勝因の一つに小艦艇の活躍があった。日本海海戦の兵力を比べると、ロシア海軍は戦艦8隻、装甲巡洋艦3隻、海防艦3隻、巡洋艦6隻、迎え撃つ日本海軍は戦艦4隻、装甲巡洋艦8隻、海防艦2隻、巡洋艦16隻、駆逐艦21隻、水雷艇41隻で、戦艦や巡洋艦などの大型艦艇についてはほぼ互角であり、日本海軍が優勢なのは駆逐艦と水雷艇であった。海戦では駆逐艦や水雷艇が禿鷹のように戦艦や装甲巡洋艦などに勇敢に襲い掛かり止めを刺したのである。この状況を「三十七八年 明治海戦史」は次のように書いている。

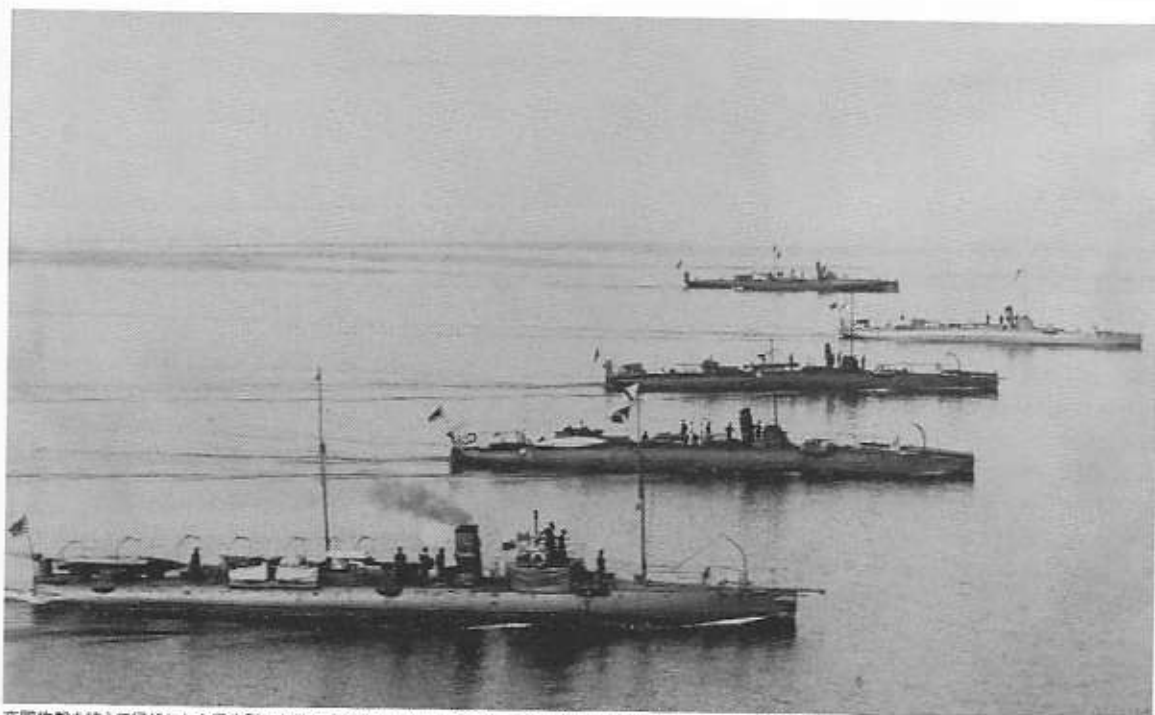
第3駆逐隊の薄雲は敵艦に接近し過

ぎて「衝突セントシタ」ものの「僅カニ免レ」、激しい銃撃を受けながら200メートルまで接近して魚雷3本を発射し、2番艦の雷は衝突を避けるため、敵の隊列間を横切って「敵艦トノ衝突ヲ辛ジテカワシ」、300メートルから魚雷を発射した。日本海海戦の敵前直角回頭について、1909（明治42）年に刊行された海軍軍令部編纂の「明治三十七八年海戦史」には次のように書かれている。

5月27日午後1時39分に敵を発見、「爾後、適宜ノ運動ヲ為シ」、2時2分に「南西微西ニ定針シ先ツ敵ト反航スル姿勢ヲ示シ」、3分後に距離8,000メートルで「急ニ東北東ニ変針シ、以テ敵ノ先頭ヲ圧セントセリ」。2時8分に2番艦の敷島が回頭を終わり、新針路となったのは距離7,000メートルで、この時に先頭のスワロフが発砲し、他艦もこれに続き、「忽ニシテ全砲火ハ我カ先頭ノ両艦ニ集中シ、巨弾雨ノ如ク艦ノ四周ニ落下」した。しか

し、「我ハ猶ホ自重シテ応戦セス」。2時10分、距離6,400メートルに至り「第一弾ヲ発射セリ。時ニ2時10分ナリ」。

敵前大回頭についてロジェストウェンスキー中將は、日本艦隊の大角度変針は「実ニ意外」であり、「甚シク乗員ヲ歡喜セシメタ」とした。これは東郷艦隊の12隻の艦艇がロシア艦隊の弾着距離内で一定の航跡を通過し、絶好の射撃機会を提供するからである。また、「露日海戦史」にはスワロフが第1弾を発射したときは、三笠が回頭を完了した時であり、スワロフが第1発を発した時の三笠の位置が、射撃上の「連続不動点トシテ存在シ」、ロシア第2艦隊の好目標となり、仮に日本艦隊が最大速力16ノットで航走するならば、「10分間ヨリ少カラサル時間」ロシア全艦隊の左舷側砲火の全部と大口徑砲の全部に射撃の好機を与えるはずであった。しかし、ロシア艦隊の「射撃術ノ拙劣」から、この「有利ナル状況」を与えられ



夜間攻撃を終えて播投した水雷艇隊。砲戦で決着が付かない場合でも、駆逐艦や水雷艇による雷撃によってとどめを刺すケースが多かった。



雷型駆逐艦の進。バルチック艦隊の攻撃以外に、ロジェストウェンスキー司令長官が座乗する駆逐艦ペドローヴィを捕獲・降伏させるといった思わぬ「戦果」を挙げた。

たにも拘わらず、「沈着ニ利用スル能ハサリキ」とした。

イギリスのネルソン提督も一時の「発砲ノ自由ヲ失フノ不利ヲ顧ミズ」に、致命的危険といわれた「敵ノ縦貫射撃ヲ冒シ」て、トラファルガーの海戦に勝利したが、東郷提督とネルソン提督の「策戦ガ恰符節ヲ合シ」、「賢明ニシテ且勇敢ナル行動」により勝利を得たと東郷ターンを評価している。

さらに、「露日海戦史」は日本海軍の優越した技量は対馬海戦に先立ち、「訓練セラレタル処少ナカラス」、日本海軍が旅順港攻囲中に得た遠距離射撃、通信連絡、交戦中の応急修理、各戦闘員の鍛錬など、「彼ニ余アリテ我ニ欠如スルモノ枚挙ニ遑いとまアラス」という。

日本海軍の行動は極度に各部隊、艦艇の特徴を「發揮シ之ヲ善用スルニ於テ殆（ほとんど）遺憾ナシ」、モロトケの門下たる彼等は「頗ル大胆」に行動し、「迅速ニ確信ヲ以テ要所ニ集中スルヲ得たり」、戦術は戦略目的と合致し、偵察と前進や戦闘序列は実戦と「照応シテ些（いささか）ノ遺憾ナカリキ」、アジアの見たる日本人は「巧ニ祖先伝來ノ鉄腕緊縛ノ戦法ヲ用ヒテ敵ヲ撃滅セリ」、これはネルソン提督のトラファルガーの海戦、テケトフ提

督のリツサの海戦の成功に対比されるべき海戦であると日本海軍を高く評価している。

しかし、不思議なことは「明治三十七八年海軍戦史」には、「丁字戦法」や「丁字戦法」などという言葉がなく、淡々と時系列に従い砲戦と砲戦運動が記述されているだけであった。現実問題として敵艦隊の前方で直角になるのは短時間であり、実際にロシア海軍が撃滅されたのは甲州軍学の「車掛かりの攻撃」、英語で書くならば“Rotating Attack”によるもので、敵艦隊を中心にして回転しながら全砲火を集中し撃滅したのである。この「円形戦法」は日露戦争前に海軍大学校教官の島村速雄大佐（第2艦隊司令長官、のち大将・海軍大臣）や、山屋他人中佐（笠置艦長、のち中将・皇后陛下の曾祖父）などが、開戦前から研究していた円形陣の変形であったが、時の経過と共に駆逐隊や水雷艇隊の肉薄攻撃は風化し、三笠艦橋の東郷大将の勇姿と敵前直角回頭だけが小説やドラマとなり歴史となったのである。

## ロシア海軍から見た敗因

「露日海戦史」は、古来戦争には幾多の軍事上の法則があるが、戦敗は主将が

自ら敗者となることを覚知した時に始まるというのは戦場における「一貫不変ノ法則ナリ」としている。ロジェストウェンスキー中将は「戦ハシテ既ニ敗者タルヲ自覚セリ」、彼は「毫モ成功ノ予感ナク交戦地帯」に入り、その行動は最初から守勢的で何等積極的に指揮せず、「成敗ラニ運命ニ委ネタルノ觀アリ」だったという。戦勝の機は戦場を制する権力を把握する時に始まる。故に主将たるものは「之ヲ獲得スルタメニ渾身ノ精力ヲ消耗シテ惜マズ」、如何なる「流血モ如何ナル犠牲モ辞セサルノ覚悟ヲ要ス」、然るにこのように重要な「制戦ノ権」をロジェストウェンスキー中将は「何等代償ヲ求ムルナク実ニ簡單ニ、且容易ニ東郷提督ノ麾下ニ捧ケタリ」と評されている。このため日本軍は意のままに、あたかも「予定ノ演習ヲナスカ如ク」戦いを進めた。

日本海軍が主導的に対応できたのは、哨戒艦がバルチック艦隊を発見し無線通信により情報を得たことにあった。その端緒となったのが病院船の航海灯であり、その後日本海軍が刻々と情報を得て有利な態勢で待ち受けられたのが無線通信のおかげであった。バルチック艦隊が強力な無線線を保有しながら妨害しなかったのは、ロジェストウェンスキー

# 日本海海戦 なにが勝敗を分けたのか？

中将の「容認スヘカラサル失策ナリ」とされ、また、日本海軍は三個の艦隊に分け、各隊指揮官に独立的行動を取らせたが、ロジェストウェンスキー中将は12隻の戦艦を直接指揮し、各級指揮官の柔軟な戦闘指揮を阻害した。また、各艦の特質を無視し巡洋艦には運送船の護衛を命じ、駆逐艦には人命救助を命じていた。このため駆逐艦などは「救助艦タルノ任ヲ尽シ」たるに過ぎずと任務割り当ての不適切を非難している。

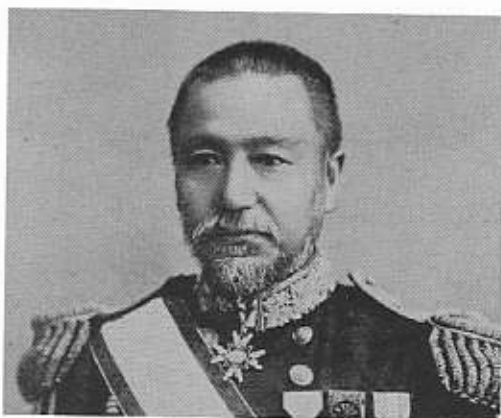
ロジェストウェンスキー中将は「意志強健」で「剛胆又職務ニ忠実」で「補給經理ノオアルモ、悲哉軍事上ノ知識皆無ナリ」、ヨーロッパから対馬海峡への遠征は、「実ニ空前ノ壮挙ナリ」とするも、「一度戦闘場裡ノ指揮官」となると、「何等軍事上ノ才略ナク」、戦闘に対する準備も指揮も「実ニ拙劣ヲ極メタリ」、「敵ニ最初ノ一撃ヲ加ヘン為ノ展開」や、「戦闘中ニ於ケル行動ニ就テモ何等討究スル所ナク」、「一モ積極的ニ行動シタル迹ナシ」などと酷評されている。さらに、ロジェストウェンスキー中将は「思慮浅ク而モ何等ノ定見ナキ行動ヲ以テ終結シ」、作戦計画は「極メテ杜撰」で、その指揮は戦闘中や準備中を問わず、「全然正当ナルヲ発見スル能ハス」、沖縄沖では石炭を搭載

中の1時間半の間に精神的に過敏となり、旗流信号を50回も掲揚し指示を連発したことをあげ、「如何ニ昂奮セルヤヲ察スルニ足ルベシ」と批判はとどまることを知らない。

しかし、麾下の艦長や将校の多くは、軍人としての手腕は遙かにロジェストウェンスキー中将より優れ、「克ク其任ヲ尽シ、軍艦ノ名譽ヲ後世ニ残シタ」と讃え、スワロフ、ポロディノ、アレクサ

ンドル三世など十数隻の艦艦の名前を列挙し、これらの艦艦の奮戦は「永久ニ我露国海軍ノ亀鑑」となるであろうと語っている。

一方、『露日海戦史』は日本海軍の勝因について、艦艦などの武器だけでなく、艦隊の構成や多年にわたる連戦連勝で高められた技量と「士氣ノ旺盛ナル」こと、各級指揮官間の統率関係が明確で、「部下ハ許サレタル範囲内ニ独断事ヲ処スル」ことができたことを指摘。各戦隊の連携は実に見事で、各級指揮官は上級指

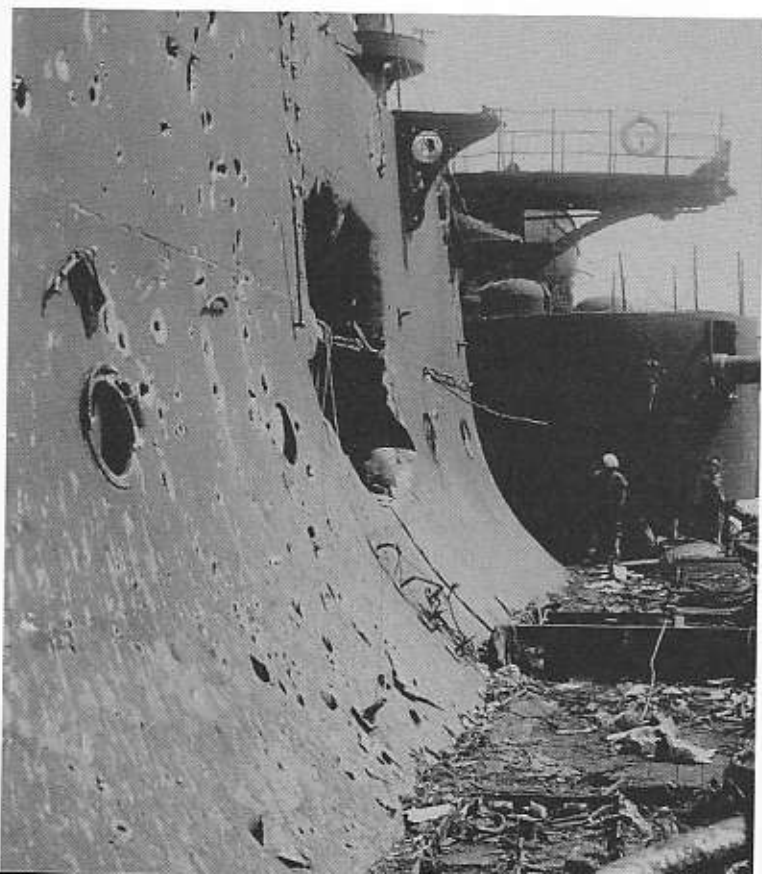


後に東郷タムエとして世界に知られる敵前大回頭を行った東郷平八郎司令官。指揮官の果敢さという点でも日露には大きな差があったといふべきだろう。

揮官に対し、「自由ニ各自ノ意見ヲ陳述セリ。各戦隊ノ協同動作ハ実ニ完全ナリ」などと評した。

要するに日本の提督は「相互間ニ嫉妬ノ念ナク」、同階級同僚間に往々見られるような「他ヲ排シテ自己ノ功名ヲ立テントスル如キ嫌疑スヘキ傾向」なく、「相互間ノ支持完全ナリ」と日本海軍の人間関係の見事さを指摘している。これに対しバルチック艦隊の人間関係は冷たく、ロジェストウェンスキー中将を司令官や艦長が訪問しても、「無愛想ナル態度、時ニ侮辱的態度ヲ以テ応接セラレ、屢々叱責セラルヲ常トセリ」、このため艦長の多くが「残酷ニシテ屈辱的ナル態度」と、全艦隊宛の「信号ヲ以テスル苛酷ナル叱責」を恐れたと『露日海戦史』には記されている。

ロジェストウェンスキー中将が帰国すると再び海軍参謀総長に復職した。しかし、しばらくすると新聞が一斉に非難し、艦隊全滅の責任、交戦なき降伏などの責任を追及する軍法会議が開かれた。ロジェストウェンスキー中将は法廷では「敗戦の責任は総て自分にあり、部下たちは私の命令に従っただけである」と部下を庇ったが、ネボゴドフ司令官以下3名の艦長に死刑(その後禁固10年に減刑)が宣告された。なお、ロジェストウェンスキー中将は、ニコライ二世の「不可抗力であった」との意向により無罪となったという。



アリョールの艦体に刻まれた数多くの弾痕。日本側の砲撃は正確性が高かった。数字上の戦力以上に、両軍将兵の士氣と練度の差は勝敗に決定的な影響を与えたのだ。